

桜は終盤を迎え、新緑の燃える季節に。太平記も「元弘の乱」のクライマックスに近づいてきました。後醍醐天皇は手に汗握る隠岐脱出劇を経て船上山へ。いよいよ、全国規模の大動乱です。読む会は、次回以降、偶数月から祝日を除く毎月開催にスピードアップされます。順調に進めば最終回は3年後の2022年8月の予定。参加者も一人ふえて、会員の現在数は13名になりました。
◇この日読んだ箇所の概要は次の通りです。

(一) 出羽入道吉野を攻むる事

(二) 村上義光大塔宮に代はり自害の事

幕府勢、大塔宮の吉野を落す (p321~329)

幕府上洛軍のうち二階堂道蘊の軍勢は大塔宮の籠る吉野を攻めた。吉野執行の手引きによる搦め手からの攻撃を受けて、宮勢は総崩れ。村上義光父子が敵に当たる間に、宮はかろうじて高野山に逃れた。

(三) 千劍破(千早)城軍の事

幕府軍、千早城水源攻撃に失敗 (p332~337)

楠正成の籠る天険の千早城を攻めあぐねた幕府軍は、水源を断つ作戦に出た。しかし、豊富な城内貯水で効果なく、逆に水源で待ちかまえる兵を急襲されて大敗し、持久戦を余儀なくされる。長引く包囲で陣中の士気はゆるむばかり。

正成、攻城用の橋を焼き落とす (p341~344)

幕府軍は最後の手段として、京都から大勢の土工を呼び寄せて、千早城を隔てる深い谷に長い橋を架けた。正成は投げ松明と油飛ばしで応戦、猛火に包まれた橋は渡る途中の兵もろとも、谷底に落ちていった。城の周辺には大塔宮が指図する野伏が群がり、包囲軍への補給兵や落ち武者を襲って、武具、衣類を強奪した。

(四) 義貞緋旨を賜る事

新田義貞、前線を離脱 (p344~348)

幕府軍に従軍していた新田義貞は、倒幕の兵を挙げることと決意して、執事の船田義昌に大塔宮令旨の入手を命じた。船田は金剛山周辺に潜む宮方の野伏を通じて首尾よく令旨を入手。開いてみると緋旨だったので、義貞は感激し、仮病を装って本国に帰った。

※葛木の高間の山 「千劍破城軍の事」の項に、こんな落首が載っている (p340)。「余所にのみ見てや

休みなむ葛木の高間の山の峰の楠」。幕府軍は楠の城

を見上げていただけで終わるのだろうか、という意。「葛木」は金剛山の事。当時は、金剛・葛城の山並みを一括して「葛城山」と呼びならわしていた。その大和側中腹に高間という土地があり、討幕派武士、高間氏の本拠だった。吉野を逃れた大塔宮は金剛山地に潜み、彼らの支援と楠との連携で倒幕活動を続けた。

(五) 赤松義兵を挙ぐる事

赤松円心、摩耶に進出 (p349~351)

苔縄城に挙兵した円心は、船坂峠の戦いで三石の伊東氏を味方につけ山陽道を抑えることに成功。すぐ東に転じて、摂津の摩耶山を京都攻撃の基地とした。

(六) 土居得能旗を揚ぐる事

伊予でも倒幕蜂起 (p351~352)

伊予の名族河野氏の庶家、土居氏と得能氏が倒幕に立ち上がった。長門探題の北条時直が討伐に向かったが、星岡(現松山市)の合戦に敗れ行方不明になった。

(七) 船上臨幸の事 (p352~360)

後醍醐天皇は、寝返った警固の武士の手引きで隠岐を脱出、隠岐守護佐々木清高の海上追尾も振り切つて、名和湊に上陸した。

(八) 長年御方に参る事 (p360~363)

天皇は、上陸地点で名和長年が頼れる人物であることを聞き出し、同行の千種忠顕を通じて助力を申し入れる。長年は一族と協議の上、受け入れて、即座に船上に天皇を導き上げ、守護方の奪還攻撃に備えた。

(九) 船上合戦の事 (p363~367)

隠岐守護佐々木清高はただちに船上山攻撃に移つたが、天険を頼む名和一族の応戦に退けられた。天皇の許には出雲守護佐々木高貞はじめ近国の武士が続々馳参。山陰の幕府方守護は敵味方に分裂した。

第9巻輪読予定ページ(6月17日)

- 1) 35先朝船上~38返されけり。
- 2) 38その後~41下されける。
- 3) 43さる程に~47早められける。
- 4) 50さる程に~52盛りをなせり。
- 5) 56さる程に~60移しける。
- 6) 64東寺へは~67謀なり。
- 7) 70糟屋三郎~77世の中なり。
- 8) 77さる程に~80仕りける。
- 9) 82さる程に~85相待ちける。
- 10) 85越後守は~88臥したりけれ。
- 11) 92血は~94なかりけり。
- 12) 95さる程に~96付きにける。